

薬草だより

歩く姿は…

樋口 剛央*

生薬名：ビヤクゴウ（百合）**薬用となるビヤクゴウの基原植物：**

・第十六改正日本薬局方（2011年）

Lilium lancifolium Thunberg, *L. brownii* F. E.Brown var. *colchesteri* Wilson, *L. brownii* F. E.Brown 又は *L. pumilum* De Candolle（ユリ科）

・中国薬典 2010年版

Lilium lancifolium Thunb., *L. brownii* F. E.Brown var. *viridulum* Baker 又は *L. pumilum*

DC.（ユリ科）

薬用部位：鱗片葉

コオニユリ（提供：松浦漢方株）

百合は日本各地に自生し、また栽培されているとても馴染みの深い花です。日本の山野にはヤマユリ、カノコユリ、テッポウユリ、ササユリ等十数種類あります。これらは一般にユリと総称されるユリ属の植物であり、同じユリ科植物で名前に「ユリ」と付いていても、アミガサユリ（鱗茎：貝母）、ナルコユリ（根茎：黄精）は属が異なります。初夏に咲く花は美しく、「歩く姿は百合の花」と美人を形容する代名詞に用いられているのは有名です。日本では8世紀には既に「万葉集」で詠まれており、現存最古の日本の本草書である「本草和名」（10世紀）にも「由利」として記されています。

秋にその地下部を掘り上げると、扁平の卓球ボール大の鱗茎（鱗片葉が幾重にも重なり合った地下茎）が出てきます。漢名「百合」は、前述のような鱗片葉が重なりあった様子に由来しており、呼称名「ユリ」には諸説ありますが、そのひとつは花が風に揺れる「ユル」が変じて「ユリ」となったというものです。

日本をはじめ、東洋では美しい花を愛でるだけでなく、鱗茎を食用や薬用にも利用しています。食用では、江戸時代の食物本草書に「蒸して柔らかくして食す…」とあり、現代では茶碗蒸し等に用いる食材「ユリ根」として、一般的にオニユリ（コオニユリ）、ヤマユリ、スカシユリの鱗茎が苦味もなく、大きくなる系統であるため、ハウス栽培されて店頭に並んでいます。薬用では、中国の「神農本草経」（2～3世紀頃）に中品として収載されており、古来より養陰潤肺、止咳、清心安神の薬用として重用されています。生薬として乾燥した鱗片葉が流通し、辛夷清肺湯、百合固金湯などの処方に配合されています。